『國民新報』1939年12月24日

[主張]　改姓改名に就て[[1]](#footnote-1)

　々からのをることになつた。のはでなすことであるが、だけはのにかされてる。であるから、なるものからのがなければののがにとまることゝなつてる。つまりをはぬものは、のそのでいわけである。

　しながら、々はがをしたを、としなければならない。しものをめないものとすれば、をすとふなをさうがないではないか。とはひながら、のをめればこそ、にするをしたのである。らばそのとはなんであるか。

　一にしてへば、一のからであつて、な、ちなべてのものを一しやうとするもので、これはからもさうであるが、のからて、ありがたいことであり、ましいことである。してこのなものゝで、もにち、もへるのにもをじないものがである。こののが、一をして、一のをぐことがしい。かゝるからるをけるものは、なることをたない。いつそのこといつて、をばにめやうではないか、とふのがこののでなければならぬ。でなく、にとふのは、々のをする、のありがたさであつて、してをせぬでもいとふではないである。

　はふだらう。にがのをればとて、ちにになれるものではないと。をにくこともされず、もも、はもされるものではないと。それはにそのりである。しのなるの一であることだけは、とへどもめないであらう。それでいではないか。一だけで十があるではないか。

　それのみではない。でが十五六までゝあるが、そのがれてにめて、のれたことをするになるはかである。てののをはりはにするものさへあつて、あたら々のをにされてからのりにぎしたこともあつた。のにいても、そのをさないにすべきである。のありがたきをば、なく、にけれやうではないか。

　にのがぽつぽつはれるになつたことは、にであるが、にやにこだわつてるである。がとめたりがとめるなもので、をれまいとするとしては一けぬでもないが、ろとしてののをして、つてなにしてしいものである。ののく、、のく、をまでするのにのいものはも、さうでないものは、、のくろそのにんだのにすべきであり、も一、、三、、、、のにひつてにすべきである。なものにするはないではないか。

1. この文章は単行本『同胞に寄す』には収録されていない。 [↑](#footnote-ref-1)